

---

# Oscar Wilde 頹廢の美学

——『ドリアン・グレイの肖像』を中心に——

大曲 陽子

(明星大学大学院生)

Wilde 唯一の長篇小説とされる *The Picture of Dorian Gray* は、1891年6月、Ward Lock 社より刊行された。この作品を通し、Wilde の美学について、以下のような展開で考えてみたい。

〔I〕この作品が Victoria 朝時代の社会にセンセーションを起した理由。

(1)Wilde の人生観、芸術観が全て集結されていたこと。

(2)快楽主義、危険なアフォーリズム、頹廢、悪の匂い等が含まれていたこと。

(3)この作品が芸術品として完成されていたこと。

さて、Wilde がこうした要素を持つこの作品を執筆した動機及び理由は何であったのだろうか。次の5つの死という観点から探ってみたい。

〔II〕5つの死をめぐる。

(1)Sibyl Vane の死。

ドリアン・グレイが愛したのは「現実」のシビルではなく舞台の上の「芸術」としてのシビルである。その芸術が恋愛によって失われてしまう。Wilde は恋愛を社会的モラルと考えていたと思う。それは、結婚という同じく社会的モラルに追従することのできなかった Wilde 自身からも窺える。従って、シビル・ヴェインは「芸術の喪失」の象徴であり、これを抹殺することで、美を主体とした芸術を貫いている。しかしそれだけではない。シビルは芸術の中で甦り、それはまた芸術の復活を意味する。

(2)Basil Hallward の死。

ドリアンに変わり果てた肖像画を見せられたバジルは苦悩し、ドリアンに改悔の祈りを捧げることを勧める。つまりバジルは「道徳」の象徴である。

芸術家たるものは芸術的共感をしない。芸術家の道徳的共感、ゆるすべからざるスタイル上のマンネリズムである。

序文にもこうある通り、芸術に道徳を入れてはならないとする Wilde にとってドリアンの存在を否定するためにはバジルを抹殺すべきであり、ドリアンは自らの手でバジルを殺害する。これは道徳の抹殺と同時にまた芸術の存続、復活を意味し、美を主体とする芸術を貫いている。

---

(3)James Vane の死。

(4)Alan Campbell の死。

James Vane はシビルの弟であり、姉を死に追いやったドリアンを恨む人物であるが偶然の事故死を遂げる。Alan Campbell は化学者であり、ドリアンへの強制的な依頼でバジルを消滅させた後、自殺を遂げる。生きていたとしても大勢に影響のない二人だが、消滅することによって、ドリアンはより安心して生きることができる。つまりドリアンが存在を否定するこの二人は「芸術の否定」の象徴であり、これを抹殺することによって芸術は存続し復活する。

(5)Dorian Gray の死。

ドリアンにとって自分の悪業を知る者は誰もいなくなった後、ただひとつ知るものはその肖像画だけである。変わり果てた肖像画を見るに耐えかねたドリアンは善にかえろうとするが、それは決して後悔や倫理的な理由からではない。肖像画を抹殺することで過去を抹殺し、ただ安楽に生きていこうとする芸術性のかげりもない理由からである。と同時に肖像画を美しく甦らせ、美を復活させるためでもあった。善へかえろうとするドリアンは、「偽善」の象徴である。悪に徹すればこそ美であったものに善という不純物を混ぜることによってドリアンの純粋性は失われ、作品の中における芸術性は失われる。この偽善、芸術の喪失を抹殺することによって、美を主体とした芸術が貫かれる。そしてまた皮肉にも美は肖像画に甦り永遠に残る。それはまた美の復活、芸術の復活を意味しているのだ。

これら5つの死を描くことでWildeは美を主体とした芸術を貫いた。

〔Ⅲ〕頹廢の美学の意味するもの。

あくまでも美を主体とした芸術の追求であり、世紀末という時代の傾向である。Wildeは、19世紀末英国の、偽善が横行し、道徳というもので包まれて真実の見えなかったVictoriaの社会において、以上の5つの死によって、本当は何が真実であるのかということと逆説的に示した。これは芸術のための芸術を貫いたWildeの、次世代への提唱でもあったのだ。

こうした意味でこの作品は、Wildeの美学を知る上で極めて重要であると同時に、まさに世紀末的な意義深い作品であると言えるであろう。